



## ▶ 第18回

### ルバートとアゴーギク

「ルバート」と「アゴーギク」は、しばしば混同して使われています。「ルバート」というのは、本来「盗む」という意味で、きちんとしたリズムと、メロディーのちょっとしたずれの間に出てくるストレスで、「アゴーギク」は、全体がゆれます。伴奏もメロディーも一緒にゆれるのです。ロマン派の音楽には多いですね。モイーズ先生はルバートについてこうおっしゃっています。「ルバートくらい自然な表現の方法はない。今の人達はルバートのない不自然な表現に慣らされてしまっているのだ。だから平気でルバートを好まないなどという人まででてくる。人が話しをするときに初めから終わりまでまったく同じ調子でやられたら閉口してしまうだろう。それでは表現などできたものではない。ルバートなくして表現はないといっても過言ではないだろう。」

フルートで一番ルバートが上手なのは、マルセル・モイーズ先生ですよ。是非モイーズ先生のモーツァルトのコンチェルトを聴いて下さい。如何に大事な音を伸ばして、次でさっと取戻しているかを聴いて下さい。オーケストラは少しもテンポが動いていませんよ。最近の演奏家はルバートがあまり上手ではないようです。

ロマン派の音楽、特にハンガリー系の音楽にアゴーギクが多いですね。ドップラー・コンクールで1位が出なかったのは非常に残念でした。技術的には非常に良いのですが、ハンガリー的なアゴーギクが不足なので外国審査員からクレームがついたのです。ハンガリー独特のアゴーギクがないと、ハンガリー音楽にならないのです。

私がウィーンで勉強している時、あるかなり高級な「バー」のショーウィンドウに小さな五線紙が飾ってあり、それを見て驚きました。『ジプシーの王に捧げる一アルトゥール・トスカニーニ』そのバーで、ジプシー音楽の王と呼ばれているアン

タル・コッシェさんという人が演奏していたんです。コッシェさんはヴァイオリンで「ホラ・スタックカート」のある部分を左の指一本で、見事なグリッサンドをつけて演奏出来る程の腕前の持主です。私はハンガリー音楽が非常に好きなので、機会を見つけてはそこへ聴きに行きました。でも料金が高いので、お客さんが訪ねてくると、その方におごらせてそこへ行ったんです。前のNHK会長の古垣さんがフランス大使で行っていた頃、その奥様が一人でウィーンに遊びに来られました。さあどこへお連れしたらいいかなと思って、そのバーへいったんです。奥様はパリの最先端の服装で現れました。ジプシーの王様が30分弾いて、休み、その後第2ヴァイオリンの人がトップになって弾くのですが、その時「皆さん踊って下さい！」と言うんです。古垣さんの奥様が私と踊ろうと言うので、私も昔は随分ダンスをやっていたので平気で踊っていたのです。暫くして、ひょっと気がつくと、私と古垣さんの奥様だけしか踊っていないのです。あの時は、足が震えましたよ。そういう所でハンガリー音楽の急所を覚えてきたのです。クラリネットの名人ウラッハがウィーンのアカデミーで教えていた頃、生徒から「先生、ブラームスを教えて下さい」と聞かれると、「そんなものは勉強することはないよ。エチュードだけやっていれば十分だ。どうしても勉強したければ、バーへ行ってジプシーを聴いておいで。」と答えたそうです。バーのヴァイオリンが如何に音楽的であるかが分かると思います。しかし残念なことに、1979年に行った時にはこのバーはなくなっていました。でも1軒だけジプシー音楽をやっている店があったのでそこへ行ってみましたが、昔のジプシーのスタイルがなくなっていて、家内に聴かせようと思って楽しみにしていたのに、がっかりして帰ったのを覚えています。ハンガリー風のルバートは、このジプシーの王様が私の先生です。



## コンサート・ホール

**我**々が一番注意しなければならないのは、演奏会場ですね。ゲネプロをやってみてびっくりすることがありますよ。こんなにここは響かないのか、これはいかんわ、と思って慌てることもあるし、これは響くなあ、楽でいい、しかしボケてしまうなあ、と困ることもあります。ですからゲネプロはどうしても一度やってみないと危ないですよ。演奏効果を考える場合には、いい演奏家、悪い演奏家になる非常に重要な条件は、その演奏会場の状態を早く演奏家がつかむことです。

レオニード・クロイツァー先生という人はピアノの本当の名人で、ラフマニノフの第2番が今度レコードで発売されましたが、聴けば聴くほど立派な人だと思います。クロイツァー先生のリサイタルの第一曲目は、必ずお客さんが一杯入った時の会場の響きのテストと、自分の手馴らしの為の曲を置いて、2曲目から本物に入っていくのです。その気持ちは分かりますね。一曲目は、演奏者の耳も慣れないでしょう。例えば、非常に困るのは、楽屋がガンガン響いて、ステージが全く響かない場合です。これは本当にいやですね。楽屋でいい気持ちになって、ステージで慌てますから。今度、サントリーで大変なホールを建てるんですよ。その集りの時、楽屋の響きはステージの響きよりも少ないように、照明も暗いように、絶対に楽屋からステージまで階段がないように、エレベーターに乗らないでステージへ行けるように、と条件を沢山出したんです。楽器を持って、梯子段上がり、エレベーターに乗る怖さってないですよ。楽器持ってエレベーターに乗る際、ドアが閉まりかける時、楽器が挟まれることがあります。危なくてしょうがないですから、楽屋からステージまで絶対に平面であること。もう一つどうしても守ってくれと言ったのは、御婦人のトイレは男性の3倍作ってくらということです。ホールの人が

難しいなと言ってましたが、どうなるでしょうか。他にも、冬にオーバーや濡れた傘を持って音楽なんか聴けないので、必ずクロークを作ること、そして、ロビーにコーヒーやビールを飲むバーがあって、楽屋にもそんなバーを作ること等、言いたい放題言って帰って来ましたよ。

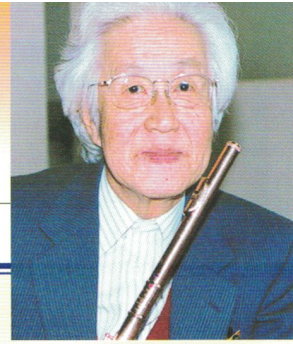
音楽会場で一番いやなのは冷房ですね。外国の音楽会場には、冷房なんてないですよ。だけど日本で夏に冷房がなかったらたまりませんね。笛を吹いていると、口のそばは暖かくなりますが、隙間風が来ると、フルートの右端の方が冷たいんですよ。とても困るので冷房の場合、風が動かないことを要求したんです。東京文化会館の小ホールは、お客さんがいないと残響が1.2秒なんです。これは短いですね。前はもっとありましたね。床を張り変えた時、じゅうたんを敷いたらすっかり響きが止まったんです。これは困りますね。あらは全部聴こえてくるし、ごまかしようがないんです。メモリアル・ホールが一番楽ですね。ところがここは誰がやっても同じように聴こえてくるので、困ってしまうんです。ある程度生の音が聴こえてきて、善し悪しははっきり分り、それで、きれいで演奏家が演奏していて気持ちよくて、聴いて気持ちよくなければ困るでしょう。ですから演奏会場は非常に大事なんですが、残念ながら東京には余りそういうホールがないんです。でもサントリーで建てるというので、言いたい放題言って、日本一のホールを作ってくれと言ったのです。

我々演奏家にとって一番大事なことは、演奏の場所です。演奏する時、ホールのコンディションをいい加減に考えて演奏にかかると、えらい恥をかくことがあるので、いつでも今度はどういう会場で演奏するかということを頭の中に置いて勉強することが、ある程度必要ですね。





●この記事は、1983年4月より約1年間に亘って、毎週、ムラマツホールに於いて行われた、吉田雅夫先生による公開講義「演奏の原理」の一部を編集部がまとめ、季刊「ムラマツ」第1号から28回に亘って掲載したものの再掲載です。



▶ 第20回

## 棒を振らない名指揮者

**昔** 新交響楽団時代に、ベートーヴェンの「交響曲 第6番『田園』」の2楽章を指揮者が8分の12拍子（1拍を3つ振る）で指揮していましたが、今では大きい拍子（4拍子）にとっていますね。ローゼンシュトック先生が日本へ来て一番びっくりしたことは、モーツァルトの「交響曲 第41番『ジュピター』」が4つに振られていたことだそうです。指揮者というのは、大きい拍子を振っていると思って下さい。オーケストラの演奏者は細かい単位で勘定しています。合わせにくいところは、室内楽でも細かい拍で勘定しないと合わなくなります。

クナッパーツブッシュという名指揮者は、顔を見ただけで震え上がるぐらい怖い人なのですが、シューマンの交響曲をやった時、一小節に一回しか棒を動かさないのです。ヨーロッパへ行って、初めて聴いた演奏がこのクナッパーツブッシュ指揮のベルリン・フィルなんです。大変な名演奏で、立ったままほとんど棒を振らないんです。その時トップを吹いていたのが、フルートはニコレであり、オーボエがリーバーマンなのです。R.シュトラウスの「ドン・ファン」には物凄くきれいなオーボエのメロディーがあるのですが、一階で聴いていて、残念ながら何の楽器だか私の耳にはどうしても分からなかったのです。おかしな、トランペットがハット・ミュートをかけて吹くはずがないし、ヴィオラじゃない。サクソ、チェロでもない。N響時代の自分のパートを思い出して、ようやくオーボエだと分ったんです。私の席からはオーボエが見えないのです。その音を聴いた時、私はヨーロッパでフルート吹きをやめようかと思いました。オーボエ吹きになろうと思ったんです。一年間の留学の間にオーボエに転向しようかと思ったぐらいすごい音なんです。その時、リーバーマンが19歳で、そして25年後に

ようやく芸大へ3か月の客員教授として呼ぶことが出来たんです。

私が日本へ帰ってくると同時に、ベルリン・フィルが来日したのです。オケのオーボエ吹きにホテルでばったり会ったので、リーバーマンは来ているかって尋ねたら、コッホさんともう一人が、「今彼は修業に出している。ワッハッハ」と笑うのです。どうしてあの名人を修業に出しているのか、分かりませんでした。リーバーマンはどこで勉強したかも分らない、不思議な人なんです。彼は吹き出すと夢中になって、息しないんです。リーバーマンがトップを吹く時は、当時ベルリン・フィルのトップのスタインズさんが2番として、そばについていて、リーバーマンが苦しうだと、そこのところだけ、パッと2つか3つの音を吹いてあげるんです。修業に出している意味が分からなかったんですが、オケの中で休みの勘定が出来ないんです。何小節も休みがあるでしょう。だから、隣でスタインズさんが勘定してあげて、「はい、お前だよ」と言われてから吹き出すんです。そして息をしないで、バーツとやっちゃうそうです。驚いた名人ですよ。来日した時、N響の定期で、シューベルトの「交響曲 第9番 長調」でオーボエのソロ・パートを吹いてもらったことがあります。その時のN響の木管族のきれいさはなかったですよ。後からN響の木管のメンバーに聞いたら、彼が入ったら我々はきたない音を出せなくなった、と言うんですよ。それほどオーケストラの中でオーボエという楽器は大事な楽器です。

ウィーンの国立オペラが爆撃で壊れて、10年目に再開した1955年、クナッパーツブッシュが「バラの騎士」を振ったんです。オケだけの練習は朝の10時から4時までの予定だったんですが、その練習は15分で終わってしまい、音を出しているのは5分位でした。本番ではほとんど棒を振らないで、あとは目でやっているんです。いい指揮者になればなるほど、棒を振らなくなりますね。